北陸支部Ｗｅｂ広報誌

[Ah!] No.48

Ｃｏｎｔｅｎｔｓ

■北陸支部活動報告

－2014年度北陸支部大会（富山）特集－

○北陸支部大会（富山）開催報告
　　大氏　正嗣（富山大学芸術文化学部教授）

○北陸支部大会講演会の報告
「新体制における課題と対応－特に震災復興対応と低炭素都市・建築の実現に向けて」
吉野 博　建築学会長（東北大学総長特命教授）
　　秋月　有紀（富山大学人間発達科学部准教授）

○建築家と学生たちのシンポジオン in 北陸支部大会（富山）の報告
　　大氏　正嗣（富山大学芸術文化学部教授）

●お知らせ

○ 北陸支部Web広報誌ＡＨ！への投稿を随時受け付けております。
建築学会北陸支部内（新潟県・長野県・富山県・石川県・福井県）に在住の方であればどなたでも投稿可能です。詳しくは下記事務局までお問い合わせください。
○賛助会員を募集しております。
　　詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(一社)日本建築学会　北陸支部
〒920-0863　石川県金沢市玉川町15番1号　パークサイドビル3F
Tel: 076-220-5566　/　Fax: 076-220-3344　/　E-mail:aij-h@p2222.nsk.ne.jp

（平成２６年９月３０日（火）発行）
Access count: 00432

■北陸支部活動報告　－2014年度北陸支部大会（富山）特集－

北陸支部大会（富山）開催報告

大氏　正嗣
（富山大学芸術文化学部　教授）

写真1　発表会風景①

写真2　発表会風景②

写真3　作品展示

2014年度北陸支部大会は支部総会の開催に合わせて、2014年7月12, 13日にウイング・ウイング高岡および富山大学高岡キャンパスにおいて開催された。本年度はシンポジウムとして、日本建築学会長の吉野博先生をお迎えして“新体制における課題と対応－特に震災復興対応と低炭素都市・建築の実現に向けて”というテーマによる講演会を開催した。講演会は2部構成とし、参加者からの熱心な質疑が見られた。また、例年実施されているシンポジオンを”建築家と学生たちのシンポジオン ”として建築家の竹早義二氏を迎え、「社会における建築の役割」というテーマについて学生たちが建築家に質問を投げかける活気あるシンポジオンとなった。

《1日目》7月12日（土）
14:30-14:35　開会式
14:35-16:35　講演会「新体制における課題と対応
－特に震災復興対応と低炭素都市・建築の実現に向けて」
17:00-19:00　懇親会（北陸建築文化賞の表彰式）
受賞作品についてはこちらをご覧ください。

《2日目》7月13日（日）
09:00-12:10　研究発表会1
13:00-15:10　研究発表会2
研究発表会のプログラムはこちら（PDFファイル）をご覧ください。
15:20-16:20　建築家と学生たちのシンポジオン「社会における建築の役割」
16:30-17:00　表彰式・閉会式
若手プレゼンテーション賞
受賞者リストはこちらからご覧ください。

■併設行事
・北陸建築文化賞受賞作品展示
・北陸支部大学高専卒業設計優秀作品展示
・ 2013年度支部共通事業設計競技優秀作品展示

■北陸支部活動報告　－2014年度北陸支部大会（富山）特集－

北陸支部大会講演会の報告
「新体制における課題と対応－特に震災復興対応と低炭素都市・建築の実現に向けて」
吉野 博　建築学会長（東北大学総長特命教授）

秋月　有紀
（富山大学人間発達科学部　准教授）

写真1　第53代日本建築学会長の吉野博先生

写真2　講演会風景

写真3　引き続き懇親会で挨拶される吉野先生

2013年5月30日の理事会において、日本建築学会第53代会長に吉野博先生（東北大学総長特命教授）が就任された。同年の建築雑誌6月号の会長就任の挨拶の中で、会長選挙に立候補された最大の理由として「東日本大震災の復興を推進するために、日本建築学会の先頭に立って貢献したい」と述べられており、就任2年目となる今年5～7月の期間に各支部を訪問された際、新体制下での震災等への取組みと今後の課題について講演されてきたが、その最後の訪問地がこの北陸であった。

北陸支部総会は研究発表会と日を連続して開催されており、会長訪問記念講演は総会と同日の2014年7月13日（日）に、富山県高岡市内にあるウイング・ウイング高岡内の高岡市生涯学習センター研修室502にて行われた。講演会の参加者は62名であった。

吉野先生のご講演に配分された時間が90分間であったこともあり、先生から二部構成とする提案をいただき、それぞれに質疑応答を行うこととなった。

第一部（14:30～15:30）では、東日本大震災からの復興の現状と課題、および建築学会の取組みについて、沢山の貴重な写真を踏まえながら紹介された。避難者は2014年4月現在、約26.3万人（避難所にいる67人含む）と未だ多く、津波被害の大きな地域と原発被害の地域で復興の進捗が大きく異なる。建築学会では震災対応として特別調査委員会を立ち上げ、“岩手・宮城支援”、“福岡支援”、“首都直下等将来の災害への対策”の三グループに分かれて取り組んでいる。宮城県では10年計画の復興が行われているが、人手や建材の不足から中々進んでおらず、2020年の東京オリンピック開催にむけて東北復興の人手不足が加速することが危惧されている。避難者が生活する典型的な仮設住宅では、断熱不足・結露・換気不足・騒音・害虫侵入など様々な環境的課題がある。その一方で、天井高が通常より高い例、木材をふんだんに利用した例、住戸の出入口を対面型にして屋根を掛けてコミュニケーションを取りやすくした例、オートキャンプ場の自然の中でずっとこのまま住み続けたいと思わせる例など、良質な仮設住宅への新たな取り組み事例についても示された。福島県では、除染の進捗に対して住民帰還が中々進まない状況が報告された。これらの震災関連において、一般市民に対してどのように学会が関わっていくべきか等、約15分間質疑応答がなされた。

第二部（15:45～16:20）では、地球温暖化対策を含めた地球環境諸問題に関して、1990年から現在までの建築学会の取組みや、関連団体と共に2050年までにカーボンニュートラル化を目指した提言について紹介された。また、都市景観の質の向上といった社会的資産としての良好な建築・街並み形成支援や建築教育支援、学会の国際化や産官学連携・情報発信などの組織運営についても示された。これら報告内容および学会の今後の在り方等について、約25分間もの活発な質疑応答がなされた。

質疑応答の後、聴衆全員が大きな拍手を持って吉野先生への感謝の意を表したが、吉野先生から「支部講演の中でも非常に活発な議論が行われたものとなった」と感想が述べられると、会場は再び大きな拍手に包まれた。最後の会長訪問地として相応しい盛り上がりを見せ、講演会は当初の終了時刻16:30を大幅に延長して成功裏に終了した。

講演会終了後、同じ建物内にあるカジュアルダイニングBONにおいて、懇親会が行われた。講演会参加者の殆どが懇親会へ参加し（61名）、講演会での熱気がそのまま懇親会へと持ち込まれたようであり、まず北陸建築文化賞表彰式が行われ、すぐに乾杯を求める声が上がった。その後、北陸支部長および学会長の挨拶と続いたが、吉野先生は講演会同様に支部会員の交流が非常に活発で活気があると感じられたそうである。懇親会も予定の時間をオーバーするほどの盛り上がりを持って、19:15頃に閉会となった。

■北陸支部活動報告　－2014年度北陸支部大会（富山）特集－

建築家と学生たちのシンポジオン in 北陸支部大会（富山）の報告

大氏　正嗣
（富山大学芸術文化学部　教授）

写真1　竹原義二氏

写真2　富山大学教授　貴志雅樹

写真3

写真4　シンポジオン風景

建築家の竹原義二氏と、富山大学教授貴志雅樹をパネリストとして、「社会における建築の役割」というテーマで学生たちを交えて議論を行った。最初に、建築家の竹原氏がスライドを交えて大阪で行われた長屋の再生や地域社会における保育園など、これまで関わられてきた作品について紹介していただき、それぞれの建築が持つ意味、そこに込めた願いや考えについて説明された。

特に、都会の中心地に敢えて土の地面とそれに連なる長屋を持ち込む意味や、福祉関連施設を設計する上での考え方など、実作を紹介しながら行われた熱のこもったご説明は、非常に興味深くまた説得力のある内容であった。

その後、学生から自分たちが取り組んでいる課題や疑問に感じていること等を竹原氏と貴志教授に質問し、様々な側面から意見や考えをお話しいただいた。竹原氏と貴志教授は古くからの交友関係を持っていたということもあり、学生たちからの質問に対してそれぞれに異なる２つの視点を提示する形で学生たちに答える形式をとりシンポジオンは進められた。

学生たちの質問は、設計における素朴な疑問から「テーマパークは建築足り得るか」といった観念的なもの、あるいは思考実験的な内容、はたまたは衰退しつつある地域における建築の役割・設計に携わる建築家の役割を問うものなど、非常に幅広くストレートなものであった。

これに対し両氏は自らの経験を事例として、ある時は明確な言葉で返し、また正反対の可能性を敢えて提示するなど、学生たちに建築における考え方には制限がないということを感じさせたのではないだろうか。 来場していた学生は、他の学生たちの質問や両氏の発言に興味深く聞き入りメモを取っていた。シンポジオンの参加者は、教員を含めて、約40名であった。

得てして、こうしたシンポジオンは講師側からの一方的な流れになってしまうことが多いが、単純に学ぶという姿勢だけではなく、問いかけ、考えて生み出すという設計に至るスタイルを垣間見ることができる貴重な経験になったのではないかと思う。